

「カーネーション」

「カーネーション」を読んで

盛岡中央高等学校附属中学校 一年

熊谷 和珠 くまがい ひとたま

私は誰かに愛して欲しいと願ったことは

あつただろうか。日和のように、身体が引き

裂かれるほど強く、痛烈に。

母に愛してもらえない子供、日和。子を愛

することができない母親、愛子。その状況が

ら目を背け続けろ父親、慎弥。この家族構図

の意味を理解したとき、体中に衝撃が走った。

理由もなく我が子を愛せない母親がいるのか。

時に家族というものは、その存在の重さ故に

鎖となり、己を縛り付けるのか。読み進める

うちに、私の心は薄暗く、冷えていった。

日和が母に愛されていいよと長が付いたの

は小学二年生。妹の紅子が生まれたときだ。

た。紅子と日和へ向けられる目の、あきらか

な凜々。紅子がどんなわがままを言おうと、

愛子は喜んで望みを叶える。だから、日和に

と、紅子は妹ではなく、母の五女さまだ。

た。私には愛子に強い怒りを感じた。理由もなく我が子である日和を嫌い、心に深い傷を負わせた。私の心にも暗雲がたち込める。母親なのにどうして。でも、そう思っていたのは愛子自身も同じだった。私は、愛子には日和を思いやる気持ちなどない非情な人間だと思っていた。訳もなく我が子を嫌い、うとましく思っただい人間だと。愛子によって、日和に深い傷を与えたからだ。しかし、それは違った。愛子も日和を愛した。と思っ。てきたのだ。しかし、その思いは日和には伝わらなかった。私の心に、夕立のような激しい雨が押しよせる。ただただ二人の和解を祈ることしかできなかった。この状況で慎弥は、親友であり、日和の塾の先生である一喜に、「家族がこわれる前に、日和がこわれるぞ」と言われ、ようやく家族の有り方を考え直すことを決心する。慎弥は、愛子の「大丈夫」という一言に甘え続けてきた。家族それそれ

がそれぞれの問題から逃げ続けていたのだ。
しっかりと向き合うことのできた今、私の心
に一筋の光が差し込んだ。
さて、この本の題名になっっている「カーネ
ーシヨニ」は、母の日に送る花として有名だ。
花言葉は「感謝・母の愛・尊敬」など、様々
である。しかし、プラスの感情だけではない。
色によつて、花言葉が違ふのだ。私は最初、
複雑な家庭環境から、母子の絆の象徴である
カーネーシヨニを題名にしたのだと思つてい
た。しかし、黄色のカーネーシヨニの花言葉
は「軽蔑」だということを知り、考えが変わ
つた。この題名は、登場人物が描く、人間の
正と負の入り混じつた複雑な感情を、一語で
表現しているのではないだろうか。
読後、この家族の生き方に深く考えさせら
れた。愛子も日和も、家族である以前に人間
だ。悩みも好き嫌いも当然である。この物語
は完全なハッピーエンドでは終わらない。み
んなが幸せでいられる距離を見つけることは、

本当に難しい。しかし、葛藤した日々を過ぎれば、と前を向いて歩いて行ける。日和は問題から逃げずに向き合っていていくことが大切なのだ。教えてくれた。

胸に手をあてて考えてみる。私はどうだろう。目の前の事から逃げずに正面から向き合えているだろうか。楽な方へと逃げ続けてきた日々が思いおこされる。好いかと理由をつけ、面倒くさいと思うことを後回しにしてしまうのだ。しかし、今回私は学んだ。自身を見つめ直すことで、私も日和のように希望の道が拓けるのではないだろうか。私も彼女のようには強さを身に付けたい、そう思った。

最後に、一番初めの問いに戻ろう。私には日和のような経験はない。しかし、愛の形は様々だ。だから愛されたいと願った分だけ人を愛そうと思おう。多くの葛藤を乗り越えて人は成長していき。そう教えてくれた日和の取柄にも。